雲の森の少年

ジョーン ノース作　猪熊葉子訳



卡通绘本资源网 www.cartoonbook.com

© 1973

雲の森の少年　ジョーン＝ノース　　少年少女・新しい世界の文学—24

NDC　933
ノース，
ジョーン
21cm　282P
学習研究社
昭和48年

訳者との契約により検印廃止

訳者—猪熊葉子（いのくまようこ）
発行人—古岡秀人
編集人—石井和夫
印刷—壮光舎印刷株式会社
製本—有限会社　黒田製本所
発行所—株式会社　学習研究社
東京都大田区上池台4の40の5
郵便番号145
振替東京142930

落丁・乱丁本は
おとりかえ
いたします。

PRINTED
IN
JAPAN

4801

＊この本についてのお問いあわせ，製本のミスなどがありましたら，下記あてにお知らせください。
文書は，東京都大田区上池台4—40—5（〒145）学研ユーザー・サービス本部事務局 児童図書係
電話は，東京（03）727—1600　あるいは東京（03）720—1111　内線　352，353

少年少女・新しい世界の文学

24

雲の森の少年

ジョーン＝ノース作

猪熊葉子訳



東京都立中央図書館

購入年月日

名まえ

学研

The Cloud Forest
by Joan North
Illustrated by Carol Everest
Original English edition published
by Rupert Hart-Davis Ltd, London
Copyright © 1965
Japanese translation rights arranged
through Charles E. Tuttle Co. Inc., Tokyo

★

訳者紹介

千葉県生まれ。聖心女子大，同大学院を卒業。1957年から58年にかけて，イギリスのオックスフォード大学に留学して，イギリス児童文学を研究。帰国後，聖心女子大助教授として児童文学の講座を担当。おもな訳書に「まぼろしの小さい犬」(学習研究社),「緑の国のわらい鳥」(大日本図書),「トムの塔」(学習研究社),「太陽の戦士」(岩波書店) などがある。

★

さし絵

キャロル=エヴェレスト

★

装丁デザイン

山口はるみ

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

雲の森の少年



需要全本请访问 www.ertongbook.com

図書室にはますます夕やみのかげが濃くなり、サー・ラチェットのすがたは、ほとんど見えなくなっていた。

テーブルのそばに立っているサー・ラチェットは、その上にしずかにおいたじぶんの両手を、だまって見つめていた。

やがて召使のカドリングが――血のけのないその顔は濃くなるかげにまぎれてめだたなかった――音もたてずにへやにはいってくると、ランプにうすぐらいあかりをともし、砂のはいった黒いビロードのふくろを主人に手わたした。

サー・ラチェットはふくろのひもをゆるめ、テーブルの上に砂をあけた。からだをかがめて、砂のつくったもようをしらべ、そっと指さきでそのもようをたどった。

「すべては、予定どおりにおちつく。」サー・ラチェットはカドリングにいった。「そろそろ、そのときがきたな。」

「あの男の子は、にげるかもしれません。」砂のもようをながめながら、カドリングはいった。「その気にならないかもしれません。この点は、だ

んなさまでも、なんともはっきりしないでしょう。」

「あの子は、生まれながらに、あの〈力〉にかこまれている。ほんとうのじぶんがなんであるか、あの子はほとんどわかっていないのだ。だから、とんと勇気ももちあわさない。わたしの思いどおりにうごくだろう。」

カドリングはだまっていた。——銀のカップに砂をすくいいれながら、ちょっとまゆ毛をつりあげただけだった。

「あの子は塔のようなものだ。内に守りはなく、外はかこまれている。わたしがその気になれば、あの子は落ちるだろう。」

サー・ラチェットは感情をあらわさず、ひややかな口調でそういったが、テーブルのはしをつかんだ手はかたくなっていた。「そうすれば……そうすれば、そのときこそ……わたしは、ついにあれを手にいれることができるのだ！」

カドリングは一礼すると、ふたたびランプを消し、主人をやみのなかにひとりのこして、でていった。主人は、光よりもやみのほうをこのんだからだ。

1

じぶんをおとしいれようとしている力がまわりにあることを、ときには知らないでいるほうがいいということもあるものだ。じぶんの敵がだれで、その敵がどれほど手ごわいやつらであるかを知らないでいたほうが気がらくなこともある。アンドリューが知っていることは、じぶんが安全でいられる場所はたったの二つしかない、ということだけだった。

その一つは、学校の生徒たちのつかう、敷布やタオル類をしまっておく戸だなのあるへやだった。それはアンドリューの寝室のちょうどまむかいにあり、バジャーおばさんの居間から遠くないところだった。もう一つは、古い僧院の廃虚のなかにあって、女生徒たちから〈お山〉とよばれているところだった。そこにはほとんど石もなく、学校のゴルフ・コースのなかでは、いちばんつまらない場所だった。だが、アンドリューは、そこがとてもすきだった。

古い聖母聖堂のあった場所にのこっている石の壁に——アンドリューが、いまちょうどそうしているように——背をもたれてすわっていると、十月も末であったのに、風が石壁にさえぎられてあたたかだった。はるか下には、海が陸地をえぐって、ペンバリー湾をつくっているのが見えた。そして、何マイルかさきの町では、燈火が夕やみのなかにかがやきはじめていた。

ここではだれも、アンドリューのじゃまをするものはなかった。もしあなたがたが、アンドリューのように十二歳の少年で、おばさんが舎監をしている女子の寄宿学校にくらしており、そして、だれからもあいてにされないとなったら、しずけさと、ひとりきりでいられる場所とをとてもたいせつに感じたとしても、むりのないことだと思うだろう。

しかし、それはともかくとして、この廃虚のふんいきには、どこか平和で、心のやすらぎを感じさせるなにかがあった。それはきっとこの場所が、むかしは聖なる場所であったことによるものではないかと、アンドリューは思った。もっとも、これまでに読んだところによれば、むかしの修道士たちのなかには、いかがわしいふるまいをしたものたちもいて、みながみな、おこないすました人びとだったとはいえないらしかった。しかし、この場所にこれまで住んだことのある修道士たちはみな、おこないのただしい人びとだったにちがいない。なにしろ、いつきてもすばらしい場所に感じられるのだ。

アンドリューは立ちあがり、のびをすると、はんぶん地面にうずもれた石壁をよじのぼった。ふきつける風にまけまいとして、アンドリューは、がいとうをしっかりとからだにまきつけ、えりを立てた。すりきれたそで口からは、手くびが六センチほどもつきでていた。アンドリューは、ポケットのおくふかく手をつっこみ、ゆっくりと学校の建物のほうへともどっていった。

南がわの庭のかどをまがると、このスカーリー校の小使をしているワーノックさんが、たき

火にする落ち葉をはきあつめているのに、アンドリューは気がついた。背をまるめたワーノックさんの小さなすがたは、不平不満のかたまりのように見えた。ワーノックさんは、何秒おきかに背をのばすと、ぺっとつばをはき、風のなかでそのつばがどのくらい遠くまでとんでいくかながめるのだった。

アンドリューはあまりはっきりしない声で、おやすみなさいのあいさつをした。だが、その声がワーノックさんに聞こえたかどうかははっきりしなかった。ワーノックさんはうなり声をあげ、こぶしをふりあげただけだったから。その身ぶりは、あいさつをかえしているというよりは、人をおどかしているという感じだった。

つばをはくかわりに、ワーノックさんがちょっとしたあいさつをじぶんにかえしてくれたらよかったのにと、アンドリューは思った。そうすれば、建物のなかへはいって、お盆にのせた夕食をひとりぼっちで食べるまえに、すこしはしたしげな会話をかわすこともできたろうに。

アンドリューは、ベッドにはいるのがいやだった。いつでもなにかにおびえていたが、とりわけ夜がいちばんいやだった。おぼえているかぎり――エミリー・レーシー孤児院にいた、まだほんの小さなころから――アンドリューは、目に見えない敵意の世界にとりかこまれていると、感じていた。とくに、だれがふしんせつだったというわけではない。どっちかといえば、むしろ無視されていたのだ。それはかえってありがたかったが、それでもどこか不安だった。

だが、さいきんでは――なぜだかわからなかったが――アンドリューは、まえよりももっと

需要全本请访问 www.ertongbook.com

不安だった。まるでじぶんに敵意をいだいている世界がもう一歩ちかづき、だんだんとそのかこみの輪をせばめてきているような感じがしていたのだ。寝室では、どうにもその不安をおしのけるわけにはいかなかった。それは、大きな戸だながめじろおしにならんでいる、ごたごたと物ばかりおおいへやだった。夜、アンドリューは、へやのすみのかげがこわかった。じぶんの上にのしかかってくるように思われる大きなマホガニーの洋服だんすもおそろしかったし、海のほうからふきつけてくる突風に青いカーテンのゆれうごくのにもぞっとした。

アンドリューは、ひしひしとおしよせてくる、このいわれのないおそれの波と必死でたたかっていた。こんなにおそろしがるなんてまったくばかげていると、アンドリューはじぶんでもそう思っていた。おそろしがらなくてはならないものなんか、じっさいはなにもありはしないのだから。

アンドリューは、窓をぱっとおしあけ、いちめんに星のかがやく夜空を見あげた。なんと宇宙は大きいのだろう。それにくらべれば、この地球なんて、なんとちっぽけな、無意味な存在だろう。それにもまして、じぶんはもっと小さな無意味な存在にすぎない。きみょうなことだが、そうかんがえると、アンドリューの心はなぐさめられた。それは、アンドリューがいだいているおそれとはなんのかかわりもない世界だった。そして、空を見ていると、そんなおそれをいだいていることが、ばかばかしく思われてきた。

やがてアンドリューは、すばやく寝じたくをした。窓からふきこむつめたい空気のせいで、

ちょっと身ぶるいがでたが、窓をしめてしまう気にはならなかった。

今晩は、いつもよりずっと気持ちがやすらかだった。アンドリューの寝室のま上にある少女たちのへやでは、やかましい物音や笑い声がしていた。その音で、とうとう先生のひとりがようすを見にあがっていったが、アンドリューには、そのやかましい物音が、むしろ不安をまぎらわしてくれていたのだった。それから、おばさん——マリオン＝バジャー——が自室に歴史の先生をまねいて食後のコーヒーをのんでいるらしいけはいがした。ふたりの話す声は、アンドリューがねむりにおちてからも、ずっとあとまでつづいていた。いかにも気のつよそうな、耳ざわりな声はおばさんだったし、気の小さいウィンクルマン先生の声はひかえめだった。

アンドリューは、まくらの下にかくしてあるみじかいろうそくに火をともすひつようもなかった。（そのろうそくは、ワーノックさんのはたらいている小屋からぬすんだものだった。）もし、ちゃんとしたろうそくをまるまる一本持っていられれば、アンドリューはありがたいと思ったろう。それというのは、いつか、電気をつけっぱなしでベッドにいるところをおばさんに見つかってからというもの、毎晩、電球をはずして持っていかれてしまうからだった。そして、アンドリューが夜中に悪夢にうなされ、悲鳴をあげても——どんなにおそろしい思いをしているときでも——おばさんは、けっしてアンドリューのようすを見にへやにやってくることはなかった。朝になると、アンドリューは、おばさんがこなくてよかったと思った。おばさんにとっては、悪夢にうなされるなんて、ばかばかしくてお話にもならないことだったろうから。

いつも寝じたくのあと、アンドリューはベッドで夢の儀式をおこなう。それは、寝いるまえに、これまでにみた悪夢のかずかずをかぞえあげ、その一つ一つをはっきりと心に思いうかべるようにすると、おなじ夢をみることがすくなくなるということを発見したからだった。もしあたらしい夢をみたなら、アンドリューはそれを古い夢のなかまにいれることにしていた。

だがこの夜は、はじめて——それはたぶん夕方、〈お山〉でおちついた気分をあじわったためだったろう——アンドリューは、夢をみなかった。

目がさめると朝だった。窓の外にはつよい風がふきあれており、窓べのリンゴの木にのこっていたわずかな葉をふるい落としていた。やかましい起床のベルを聞きながらよこになっているアンドリューは、胸があたたかく、よい気分だった。

さいわいなことに、その日は土曜日だったから、起きて村の学校に歩いていくひつようはなかった。(アンドリューは、スカーリー校の授業にでることはゆるされていなかった。)そこでアンドリューは、女中のグラディスがお湯をいれた水さしを持ってきて、ドアをノックするまでおちついた気分でよこになっていた。アンドリューがじぶんのへやにこもって、だれのじゃまもしないでいるかぎり、とやかくいうものはいなかった。

アンドリューがくらしていたのは、おもに敷布置き場のへやだった。お盆の上にのっている食事をとるのは、いつもそのへやでだった。へやは、敷布をしまってある戸だなで四方をとりまかれていた。このへやには小さな窓が一つしかないので、いつもあかりをつけなくてはなら

なかった。家具としては、インキのしみのついたテーブルが一つ、いすが一つ、それに小さな石炭ストーブが一つだった。やっと起きだしたアンドリューは、この朝そのへやで、マーマレードつきのパンと、かたくなったソーセージの朝食を食べてしまうと、こっそり手にいれた本やまんが雑誌を読んだり、ナイフをもてあそび、すでにテーブルにほりつけたA・Bというかしら文字をもっとふかくえぐったりして、時間をすごした。

アンドリューは昼食のあと、おばさんによばれるまでこのへやですごした。おばさんはいつものように、手あみの暗緑色のスーツを着ており、長くてとんがった鼻のさきは、ややピンクがかった色をしていた。

「めがねはどうしたの?」おばさんはたずねた。「また、こわしたなんていわないでよ。」

「つぶれちゃったんです。」アンドリューはふくれっつらでこたえた。「でも、かたっぽのつるがちょっとおかしくなっただけです。はりがねの切れっぱしがあればなおせます。」

「ここへ持ってきて、わたしのテーブルの上にのせておきなさい。ペンバリーへいったときに修ぜんさせるから。これから、よく注意するのよ。わたしは、お金のなる木じゃないんですからね。」

「グリーン先生は、もうめがねをかけなくてもいいって、おっしゃいました。」

「ばかおっしゃい!」バジャーおばさんは、じぶんがめがねをかけていたから、アンドリューもとうぜんめがねをかけるべきだと思いこんでいるようすだった。

「先生が、そんなことおっしゃるはずがありませんよ。それはね、あんたがあんまりだらしがないから、そうおっしゃったのよ。いつでも、めがねはどこだ、どこだってさがしまわってるから。」

アンドリューはなにもいわなかった。おばさんのいうことなんかぜったいにきかないぞというたいどで、おばさんのはいている、灰色のうねあみの毛糸のくつしたを見つめていた。そのふとくてみじかい足の、なんとぶざまなことだろう！　めがねのことなら、なんとでもするがいい。こっちはぜったいに、めがねなんかかけないぞ。それに、あんまりうるさく口をだすなら、またこわしてやるからな。

「さて、と。」バジャーおばさんはいった。「スペンサー＝チェレル校長先生からのことづてを、サー・ラチェット＝アナリーのところへ持っていっておくれ。また、電話が故障したんでね。」

「あのお屋敷へ？」アンドリューは、めんくらっていった。「どうしても？　ぼく、あそこへいくのすごくいやなんです。」

「アナリー屋敷にいけるなんて、あんたはとても運がいいのよ。」おばさんはいった。「だいいち、かんがえてもごらん、この学校に住まわせていただけるのも、校長先生のおかげなんですからね。あんたが校長先生のお役にたてることなんか、めったにないことよ。さあ、でかけるまえに手をあらって、ちゃんと頭をとかすんですよ。さっさとおし。ちょっと運動すれば、

あんたのからだのためにもなるんだから。」

十分後、アンドリューは、みすぼらしい灰色のつんつるてんのがいとうを着、バジャーおばさんのあんだ、あかるいむらさき色の毛糸のえりまきをして、でかけた。アンドリューは、このえりまきがいやでたまらなかったのだが、おばさんが、していけといいはったのだ。学校の門をでると、アンドリューは、えりまきをいけがきのなかにつっこんだ。あとで持ってかえればいいんだから。

しげりすぎたいけがきの道を、お屋敷のほうへと歩いていきながら、アンドリューは気をひきたてるために、ときどき、前に落ちている木の葉をけとばした。しめった木の葉は、けっても、ひらひらと空中にまいあがりはせず、たがいにへばりついているだけだった。なぜだかわからないが、アンドリューはお屋敷へいくのがいやでたまらなかった。これまでにバジャーおばさんの使いで何回かここへよこされたが、いくたびに、そのいやな気分はつよまるのだった。

両がわをびっしりと木ややぶでかこまれたじゃり道は、どこまでもうねうねとつづいていた。道の両がわにひろがる広大な土地には、小さな墓地と、緑色のアオミドロでおおわれた、くらい感じの沼があるほかは、手いれもしてないただの野っぱらだった。

やっと——道のさいごのかどをまがると——お屋敷が見えた。灰色の石づくりの建物は、低くて長かった。ところどころにまばらな樹林のある草地にかこまれたお屋敷は、高い台地の上

需要全本请访问 www.ertongbook.com